

# Interview

文部科学省と厚生労働省の検討会から考える  
保育の「質」を向上させるヒント

## これからの社会に向け、 議論が加速する 保育の「質」を高める園づくり

After/With コロナの時代に子どもの育ちを支えていくために、各園にはどのような保育が求められるのでしょうか。文部科学省と厚生労働省ではこれからの保育のあり方を見据えて、保育の質向上を実現するための検討会をそれぞれ実施しています(図1)。2つの検討会で委員を務める京都教育大学教育学部の古賀松香先生に、検討会での議論の内容を踏まえ、各園で保育の質向上に取り組む上でのヒントをうかがいました。

\*本記事は2021年2月上旬に取材しました。



古賀松香 (こが・まつか) 先生

京都教育大学教育学部教授。専門は、保育の質、保育学など。共編著に、『社会情動的スキルを育む「保育内容 人間関係」— 乳幼児期から小学校へつなぐ非認知能力とは』(北大路書房) など。

**Q** 今、なぜ保育の質向上が議論されているのでしょうか。検討会の目的や議論の全体像を教えてください

**A** 保育に関する議論は「量」から「質」へと変化している

これまで日本では、待機児童問題に対応するために保育の「量」の確保に向けた議論に重点が置かれてきました。その後、2015年に始まった「子ども・子育て支援新制度」のもとで、課題を残し

つつも保育の受け皿の確保が進んだことから、ようやく今、「質」に関する本格的な議論に移行しつつあります。そのため、日本の保育の質に関する取り組みはまだまだ遅れている状況です。2019年には幼児教育の無償化が始まりましたが、日本ではこの施策は少子化対策の一環として議論されてきました。一方、海外では、幼児教育の充実が国の発展を支えるという考えのもと、幼児教育の質の保障とそのため評価を一体化した上で、無償化を組み合わせた制度設計がなされています。

文部科学省と厚生労働省の2つの検討会では、新たな幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領(以下、要領指針)のもと、いかに各園の保育の質を高めるか、

### 図1 保育の質向上を実現するための検討会

#### 文部科学省

幼児教育の実践の質向上に関する検討会

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/140/index.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/140/index.htm)

#### 厚生労働省

保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会

[https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/other-kodomo\\_554389.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/other-kodomo_554389.html)

それぞれの制度や文化に合わせた話し合いが進められています。

厚生労働省の検討会では「そもそも保育の質とは何か」というところが議論されました。そして、「保育の質は、子どもが得られる経験の豊かさと、それを支える保育の実践や人的・物的環境など、多層的で多様な要素により成り立つ」と定義されたことは大きな成果といえます。さらに、従来は保育の質というと人材確保や面積基準などの構造面に目が向きやすかったのですが、検討会では保育の内容に重点を置いた議論を進めています。一方、文部科学省の検討会では、これまでに積み上げてきた幼児教育の制度や文化をベースに、外国籍の子どもや特別な支援が必要な子どもへの対応

など、さまざまな具体的な検討を行っています。

また、いずれの検討会でも保育の質の保障に向けて、園による自己評価を充実させるしくみづくりにも力を注いでいます。その一環として、厚生労働省の検討会では、「保育所における自己評価ガイドライン」を策定し、その活用をサポートするハンドブックも作成しました。文部科学省の検討会でも、国立教育政策研究所・幼児教育研究センターのプロジェクト研究において開始されている、日本に合った評価指標案の検討状況の報告もされています。

こうした議論を通して、日本の園が抱える課題を踏まえて国や自治体による制度を見直ししながら、保育の質向上をめざしています。

**Q** 厚生労働省では、検討の過程で「子どもを中心に保育の実践を考える」という実践事例集が作られました(図2)。その項目に沿って、保育の質向上に向け、すべての園に共通する考え方をうかがいます。まず、職場の風土づくりの工夫について教えてください

**A** 子どもにかかわるすべての人の考えが尊重される対話的な風土づくりを

検討会では、対話的な風土づくりの大切さが繰り返し話題に出されました。ベテラン、そして新人の保育者、あるいは保育の実習生など、子どもにかかわるすべての人にはそれぞれの感じ方があります。そうした一人ひとりの実感をもとに自由に考えが表明でき、「私を感じたこと」と「あなたを感じたこと」が同等に尊重される雰囲気があることが、対話的な風土の基盤となるでしょう。

対話の質が高まると、自分たちの保育のよさを見つけたり、課題に前向きに取り組んだりして、

保育の内容に工夫が生まれやすくなります。一方、ベテランの意見ばかりが重視される状況では、なかなか対話は根つきません。若い保育者が「その考えは間違っている」などと否定されたら、自分の考えを述べる勇気を失ってしまうでしょう。

豊かな対話を生み出すためには、子どもの姿について感じたことなどを語り合う場をもつことが効果的です。園長先生やベテランの保育者が聞き役になり、共感的、肯定的な態度を意識すると、話しやすい雰囲気が生まれます。自分の考えを表明するツールとして付せん紙を活用するなど、ちょっとした工夫で対話は促進されます。

現在は新型コロナウイルスへの対応として、今まで当たり前のように引き継がれてきた保育や行事の再考が迫られています。どこを削り、どこを残すかという判断は園の理念に深くかかわりますから、園内で徹底的に議論する必要があるでしょう。そうした対話を通して保育を見つめ直し、語り直し、全員で共有して、子どもを中心とした保育の質向上をめざしていただければと思います。

#### 図2 厚生労働省作成の実践事例集

「子どもを中心に保育の実践を考える～保育所保育指針に基づく保育の質向上に向けた実践事例集～」

##### 事例編の内容

- 1 対話的な職場風土づくりのための工夫を活かす
- 2 記録や計画、発信物の工夫を活かす
- 3 園内外の研修を活かす
- 4 環境構成の工夫を活かす
- 5 保護者や地域の人々との連携を活かす

**Q** 記録や計画、発信物などはどう工夫するとよいでしょうか

**A** 記録を計画や実践に生かすしくみづくりを

記録の取り方については、各園でもさまざまな工夫が進んでいると感じます。記録の継続のために重要なのは、記録をつらい作業にしないことです。子どもの様子を見ていて書きたいと思ったときに、サッと記録できるようなしくみを取り入れるとよいでしょう。また、記録の良しあしを評価するのではなく、保育者一人ひとりの考えをできるだけ尊重し、各園で焦点をあてて取り組みたいところに合った記録のしかたを工夫していくとよいと思います。

一方で、作成した記録が十分に活用されていないという場合もあるようです。せっかく書いた記録が役立てられないと、保育者は意欲を失ってしまうでしょう。

本来、記録は、保育計画に基づいて実践した結果、子どもにどのような姿が見られたかななどを観

察して、計画や目標の振り返りに生かすためのものです。ですから、「計画とは異なる展開になったけれど、こんな姿が見られたから次の計画を変更しよう」と、記録と計画が循環するしくみを生み出すことが大切です。決して大きな改定が必要なわけではありません。園の理念や育てたい子どもの姿を意識したときに、「何が大事なのか」や、「それが何につながっているのか」が見てわかる、書いていて実感ができる記録にすればよいのです。

園により、ふさわしい記録の形はさまざまです。ぜひ各園で、記録を見返しながら生かしているところや書きづらいつころについて対話をしてください。そして、変えたいところがあったらまずは試してみることを重ね、保育に役立つ記録を探っていくてください。

**Q** 園内外の研修のあり方を教えてください

**A** 子どもや遊びの見方をテーマとした研修に重点を

各園で保育の質を向上させるためには、保育者一人ひとりの子どもや遊びの見方を磨くことが欠かせません。研修でも、そうしたテーマを定期的に取り入れてみましょう。

例えば、あるクラスの保育の様子を動画に撮影し、みんなで共有して語り合う研修が考えられます。まず保育を担当した保育者が、どこに面白さや課題を感じたかを話し、それをもとに子どもの姿に迫りながら対話を深めていきます。

その際に注意したいのは、「保育には答えがない」という前提で話し合うことです。保育を公開する保育者に対して無用な批判をすることなく、相手を大切な存在として、尊敬の念をもって意見を述べ合うことを心がけましょう。そのように一人ひとりの感じ方を受け入れ合う場ができると、「そん

な見方もあるのか」と、保育者の視野は広がっていきます。園長先生やミドルリーダーの保育者は、保育を担当した保育者を認めて励まし、相談に乗り、保育者自身がやってみたいことを支えていたきたいと思います。

コロナ禍では集合研修が難しい状況ですが、私がかかわる京都教育大学附属幼稚園では、園長先生などが保育の様子を動画に撮影し、互いに見合う機会を増やしています。普段は隣のクラスの状態を把握しきれないことが多いので、「こんな声かけをしているのか」「子どもはこんなことを楽しんでたのか」など、それぞれが多く気づきを得ることができました。そうした園内研修を行い、身近な学びを得る機会を充実させてもよいかもしれません。

**Q** どのような環境構成が保育の質向上を支えるのでしょうか

**A** 育てたい子どもの姿を実現するための環境について議論することが大切

園内には、「以前からあるから」という理由で物が置かれているケースが見られます。まず園の理念や育てたい子どもの姿を踏まえ、既存の環境を見直しましょう。そして、目の前の子どもの状態や課題を考え、どのような遊びを充実させたいかをじっくりと話し合うと、望ましい環境構成が見えてきます。

ある園では近隣の畑での栽培活動を大切にしていたのですが、事情により畑が使えなくなりました。しかし、命を育むことや食の大切さを伝える活動は園として継続していきたいことを確認し、園庭

の真ん中を畑にすることを決めたといいます。この畑も、今後の子どもの状況や発達に合わせ、見直していくこともあると思います。

どのような遊びや活動を充実させるかを考えるときは、家庭や地域では実現しづらいことを園で経験できるようにするという視点も大切です。例えば、地域にもよりますが、異年齢の子どもたちと群れたり、自然に触れながら遊んだりする機会は減る傾向にあります。園の理念と考え合わせ、そうした遊びを園生活で充実させられたら、園に通う大きな意味の1つになると思います。

**Q** 保護者や地域の人々とはどのように連携していくとよいでしょうか

**A** 情報発信を出発点として地域全体で子どもを育む関係づくりを

新しい要領・指針にもあるように、今後、園には保護者や地域の人々との連携を強化し、家庭同士や家庭と地域をつなぐ地域コミュニティの中核的な役割を担うことが期待されています。その出発点となるのは適切な情報発信です。OECD\*の調査によると、日本の保育者は自身の仕事が「社会的に評価されていない」と感じる割合が他国と比べて高いことがわかっています。これからは、子どもの育ちや遊びの大切さなど、保育の意義をしっかりと伝えて、社会的な理解を得ていく努力がいつ

そう大切になるでしょう。家庭や地域への情報発信は、幼児教育の無償化を受けて説明責任を果たすという意味でも、これまで以上に重要です。

地域との連携強化を進める上では、国や自治体のサポートも欠かせないでしょう。京都市では、15園の公立幼稚園のすべてに学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を立ち上げ、地域全体で子どもの成長を支えるしくみづくりを進めています。そうした動きが全国的に広がることを期待しています。

### 保育者の方へのメッセージ

コロナ禍では保護者や地域の人々に幼児教育施設の大切さが改めて認識され、保育者に対して感謝のメッセージが届けられる状況も多く見られました。何が正しいのかわからず、10年後にわかる正しさがあるかもしれない

という不安の中で日々の保育をされていると思いますが、みなさんは一人ひとりの子どもの成長を支え、地域や社会に貢献するすばらしい仕事に従事されているということをお忘れなくいただきたいのです。みなさん自身の心のケアも大切にしながら仕事を楽しみ、子どもにとってよりよい保育を探究し続けていただきたいと思います。

\*経済協力開発機構のこと。世界37か国が加盟している。